



● 27年法話会 今回は「いのち4(非戦・平和の誓い)」です。

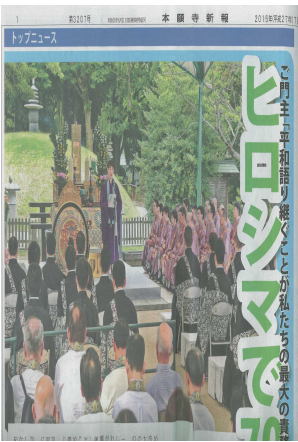
最近国民の関心の大きなものの一つに、戦争と平和に深く関係した「新安全保障法案」の審議の行えであろう。

そこで今回は、戦後70年の節目に当たり、仏教、特に浄土真宗の立場から、「非戦・平和」について考えてみたいと思います。

1 浄土真宗本願寺派(西本願寺)「平和を願う法要」を営む!

資料「本願寺新報(7月20日号)」

◆ご門主「平和を語り継ぐことが私たちの最大の責務」 ヒロシマで70年法要



広島別院と安芸教区は、広島市中区・広島平和記念公園内・原爆供養塔前で、7月3日ご門主親修で「平和を願う法要」を営みました。

法要の後にはご門主がお言葉「戦後70年によせる平和への願い」を述べられました。(写真左) ※お言葉の全文は、後述。

「(前略) こうした記憶の風化に対し、平和を語り継ぐことが、戦後70年の今を生きる私たちに課せられた最大の責務です。よりよい未来を創造するためには、仏智に教え導かれ、争いの現実に向きあうことが基本でありましょう。(中略) 戦後70年という歳月を、戦争の悲しみや痛みを忘れるためのものにしてはなりません。そして戦後70年というこの年が、異なる価値観を認め合い、共存できる社会の実現のためにあることを、世界中の人々が再認識する機会となるよう、願ってやみません。」

また翌4日には同区・広島別院で「全戦争死没者追悼法要並びに原爆忌70周年法要」が、ご門主親修で営まれました。

2 「戦争や原爆の事実を知り、感じたことを伝えて」

広島別院で平和を語る集い開催!

資料「本願寺新報(7月20日号)」

「非戦・平和を願って70年」をテーマにさまざまな取り組みを行ってきた安芸教区は、6月27日にシンポジウム「平和を語る集い」を広島別院で開きました。

映像作家の田邊雅章さん(77 西向寺門徒)が制作した記録映画「知られざるヒロシマの真実と原爆の実態」を上映後、田邊さんの講演を聞き、非戦・平和への思いを新たにしました。

田邊さんは講演の中で、「60歳を過ぎるまで生家のことも被爆していることも黙って、原爆に背を向けて生きてきた。でも、ある時、原爆ドームを背景にピースサインをして記念撮影をする修学旅行生を見かけ、ショックを受けた。

その下には、私の母と弟がいるであろうにと。しかし、その子たちが原爆の実態を知らないからだと気付かされた。原爆と向きあう決意をし、原爆投下前と直後を知る数少ない体験者として、原爆によって大切な家族、暮らしの全てを失ったもの一人として、体験したものでないとわからない戦争や原爆への怒り、憎しみ、悲しみを伝えなければならないと思った」と映像化に取り組んだ経緯を語りました。

### 3 浄土真宗関係の取り組み（HPから転載）

#### (1) “安保法制は愚策”テーマ 長門市油谷で小林節氏講演 浄土真宗住職らが主催

安倍政府が安保法制を国会で強行可決するなか、衆院憲法審査会で「集团的自衛権行使、安保法案は違憲」との見解を示した憲法学者の1人、慶応大学名誉教授の小林節氏が、長門市の油谷文化会館「ラポールゆや」で講演することが決まった。講演は「新安保法制は法的、政治的、経済的に愚策」と題して、9月5日（土）におこなわれる予定。油谷は、**安倍首相の祖父・安倍寛元衆議院議員の故郷であり、実父・安倍晋太郎元外相の墓所がある**など、“地元中の地元”である。長門市油谷での小林教授の講演が大きな注目を集めている。

#### (2) **安倍首相の祖父安倍寛(元衆議院議員) は、反戦の立場で翼賛体制批判**

「油谷町史」などによれば、安倍首相の祖父・安倍寛は、戦前・戦中にかけて、2期衆院議員を務め、戦中の1942年の「翼賛選挙」では、当時の東条英機らの軍閥主義を鋭く批判し、「大政翼賛会非推薦・無所属」で出馬し当選した。翼賛会・非推薦議員団として**軍事政権に厳しく対立したとされる**。

会では「理想を求め戦争反対の立場で翼賛体制を批判した安倍寛さんの頑張りに今改めて胸をうたれる」とし、「安保関連法案を成立させてはいけない。長門市のみなさんも関心を持ってほしい。小林さんの講演が九条を考えるきっかけになれば」と訴えている。

講演は当日午後2時からで、入場は無料。

また会の中心メンバーの高橋見性・常正寺住職が組長を務める、**浄土真宗本願寺派の山口教区大津西組は、先月10日付で、「安保関連法案に反対し、廃案を求める要望書」を安倍晋三長門事務所を通じて安倍首相に提出した。**

大津西組は全19カ寺で組織され、昨年7月に閣議決定で集团的自衛権の限定行使を容認したさいにも「納得できない」として反対の要望書を提出。全寺院のうち、16カ寺が連名し、16カ寺の総意として今回も提出した。

要望書のなかでも、戦前・戦中にかけて反戦の立場で翼賛体制を批判した安倍寛元衆議院議員の姿勢を示し、「安倍家の誇りを受け継ぎ、危険な方向に導かないでほしい」と強調している。

#### (3) **真宗大谷派（東本願寺）安全保障関連法案に対する宗派声明発表**

このたび、国会に提出された「安全保障関連法案」に対し、真宗大谷派では5月21日、宗務総長名による宗派声明を発表しました。

日本国憲法の立憲の精神を遵守する政府を願う 「正義と悪の対立を超えて」

#### 【次のことを話し合ってみましょう！】

- 1 本願寺新報等前記の記事を読んだ感想を話し合みましょう。
- 2 戦争（注1）は、なぜ起きるのでしょうかを話し合ってみましょう。（是か・非か も）
- 3 平和（注2）な世の中を築くために、今私にできることは何かあるのでしょうか？

**注1 戦争** 広くは、民族、国家あるいは政治団体間などの武力による闘争をいうが、国家が自己の目的を達成するために行う兵力による闘争がその典型である。

（紛争 人と人の争い全てに対して使います。武力が関わって無くても使います。）

**注2 平和** 1 戦争や紛争がなく、世の中がおだやかな状態にあること。「世界の一を守る」  
2 心配やもめごとがなく、おだやかなこと。「一な暮らし」  
（※ただ戦争・紛争のない世の中が、平和であるとはいいません。）

異なる価値観を認め合う社会へ

ただ今、皆さまと共に勤めいたしました「平和を願う法要」にあたり、第2次世界大戦で犠牲になられたすべての方々に対し、衷心より追悼の意を表します。

70年前の8月6日、たった一発の爆弾によって、一瞬にして美しい広島の街が破壊され、多くのかけがえない命が失われました。また、原子爆弾のもたらした惨禍(さんか)は、放射能の影響として、また痛ましい記憶として、今も多くの方々を苦しめ続けています。このことを思うとき、あらためて人間の愚かさ、戦争の悲惨さ、原子爆弾の非道さを感じずにはられません。

私は、皆さまと共に、戦後70年を迎える広島の地で、平和への願いを新たにすることに深い意義を感じています。

第2次世界大戦が終わって70年が経とうとしています。しかし人類が経験したこともなかった世界規模での争いが起こったあと、70年という歳月が、争いがもたらした深い悲しみや痛みを和らげることができたでしょうか。そして、私たちはそこから平和への願いと、学びをどれだけ深めることができたでしょうか。

戦争の当時を生きられた方々が少なくなっただけでなく、戦争がもたらした痛みの記憶は遠いものとなり、風化し忘れられつつあります。また先の大戦において、本願寺教団が戦争の遂行に協力したことも、決して忘れてはなりません。こうした記憶の風化に対し、平和を語り継ぐことが、戦後70年の今を生きる私たちに課せられた最大の責務です。よりよい未来を創造するためには、仏智に教え導かれ、争いの現実に向きあうことが基本でありましょう。

そもそも、あらゆる争いの根本には、自己を正当とし、反対するものを不当とする人間の自己中心的な在り方が根深くあります。宗祖親鸞聖人は、「煩惱具足(ぼんのうぐそく)の凡夫(ぼんぷ)、火宅(かたく)無常の世界は、よろづのこと、みなもつてそらごとたわごと、まことあることなし」と、人間世界の愚かさを鋭く指摘されています。私たちが互いに正義を振りかざし、主張しようとも、それはいずれも煩惱に基づいた思いであり、阿弥陀如来の真実のはたらきの前では打ち崩されてゆくよりほかはないという事でありましょう。それはまた、縁によって、どのような非道な行いもしかねないという、私たち人間の愚かさに対する警告でもあります。

いかなる争いにおいても悲しみの涙をとまなうことを、私たちは決して忘れてはなりません。受けがたい人の身を受け、同じ世界に生まれ、同じ時間を生きている私たちが、お互いを認めることができず、どうしてこの上、傷つけ合わねばならないのでしょうか。一つひとつの命に等しくかけられている如来の願いがあることに気付かされるとき、その願いのもとに、互いが互いを大切に、敬い合える社会が生まれてくるのではないのでしょうか。少なくともお念仏をいただく私たちは、地上世界のあらゆる人びとが安穩のうちに生きることができる社会の実現のために、最大限の努力を惜しんではなりません。

戦後70年という歳月を、戦争の悲しみや痛みを忘れるためのものにしてはなりません。そして戦後70年というこの年が、異なる価値観を互いに認め合い、共存できる社会の実現のためにあることを、世界中の人びとが再認識する機会となるよう、願ってやみません。

2015(平成27)年7月3日

浄土真宗本願寺派門主

大谷 光淳